

平成 15 年度特別研究費 研究成果の概要

研究名	学生による薪能のアートマネジメント 第3回 静岡文化芸術大学薪能(公開講座/能面展)				
配分を受けた 特別研究費	学長特別研究費 5,000 千円				
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究の 場合の分担
	文化政策	芸術文化	助教授	梅若猶彦	薪能公演の総責任 者、新作狂言審査員
共同 研究 者	文化政策	芸術文化	教授	深井晃子	新作狂言審査員 研究者代表への アドバイス
	文化政策	芸術文化	教授	扇田昭彦	解説担当 新作狂言評価
	文化政策	芸術文化	教授	伊藤裕夫	新作狂言評価 学生へのアドバイス
	文化政策	芸術文化	助教授	荒川裕子	新作狂言の評価、学 生へのアドバイス
	文化政策	芸術文化	講師	谷川眞美	新作狂言の評価、 学生へのアドバイス
発表 の 方法	1 紀 要			号 数	第 号 (年 月発行)
	2 学会等での発表 学会等名:			発表日 (発表 予定日)	平成 年 月 日
	3 その他 発表の方法:第3回 静岡文化芸術大学薪能 公演として発表した。 公演とは別に、公開講座を2回本学で行った。 別の企画として能面展を浜松駅メイトにて開催した 薪能プロデュースについては芸術文化学科 が出版を予定している教科書に載せる、 16年3月出版予定			発表日 (発表 予定日)	平成15年 10月7日薪能公演 10月6日公開講座 10月5日公開講座 9月上旬能面展 (平成16年3月 出版予定)

(研究の目的等)

静岡文化芸術大学薪能の研究目的は、第1回(2002年)より一貫したものであり、それは本学の学生の伝統芸能への接点を、企画制作の立場として持たせることにある。

自明であるが、企画制作には主体性が不可欠であることから、薪能プロジェクトチームの独自の企画アイデアを評価する。

薪能公演は、学生の企画制作の学習としての利点のみならず、本学と地域住民とのコミュニケーションの媒体となることを目的ともしている。

また、公演とは別に公開講座/能面展を企画することにより、能楽公演のみならずその歴史、演出技法、能面の理解を深めてもらうことを意図した。

またプロジェクトチームとは別設定であり、また同時進行するもう一つの企画を立てた。それは新作狂言の台本/演出を学生が担当するというもので、このことにより、狂言の現行曲の鑑賞のみではなく、実際に創作の場を学生が体験することを目的とした。

(研究の実施方法等)

薪能プロジェクトチームを本学内で募集し、結果として以下の学生が中心メンバーとなった。

池田彰子(芸術文化学科 現4年、梅若ゼミ)を代表とするチームを結成し、他のメンバーの役割分担を決定した。

公開講座を2回開催し、別に浜松駅メイワンにて能面展を開催した。

第1回 能楽入門/歴史(本学講堂にて)10月5日

第2回 能楽体験(本学体育館にて)10月6日

別枠 能面展(メイワン) 9月上旬

薪能公演は本学の「出会いの広場」で開催された。

解説の後、舞囃子1番、新作狂言1番、能1番、が演じられた。

新作狂言は本学の学生2名が演出した。

(得られた成果等)

学生で構成される薪能プロジェクトチームは、既に3回の薪能の企画制作を経験した。

チームの構成員は毎年新規に募集するが、その中の数名は2度3度の経験を持ち、彼等が一年生に指導するという伝統がチーム内で形成されつつある。

先輩の指導が往々にして教員の指導を凌駕することは、先輩の権威が友情に付与されるのに対して、教員の権威は制度からくるものであり、チームへの教員の強制は一切行わずして主体的に極限までの労働を行ってくれた。これは得られた成果としては尊いものである。

つまり薪能修行と言われるプロジェクトチームの仕事量は想像を絶するものであり、学生にとって合理的なメリット(現時点では卒業研究として認知されていない/アルバイト料の皆無等々)はないが、精神的な修行と学習、また本企画/制作が地域住民との交流に貢献したことは明らかである。